

平成 25 年 12 月

昭和 45 (1970) 年卒業

小柴 憲光

「劇評のすゝめ」

私が初めて歌舞伎の舞台に接したのは中学二年生の昭和三十六年九月で、都内学生を対象に伝統芸能振興を目的として歌舞伎座昼の部開演前に上演され、現在も続いている「子供歌舞伎教室」の第九十九回公演「壺坂靈験記」であった。出演役者の記憶は定かではなく最近「松竹百年史」で調べてみると、お里に市川銀之助(現市川團蔵)、沢市に尾上松也(現大谷桂三)の配役であった。お里に現團蔵とは、今となつてはそのミスマッチが微笑ましくもあるが、その時は初めて見た女形の美しさに魅了され、大歌舞伎観劇の夢と希望を大きく膨らませたことをはっきりと記憶している。

そんな経緯があり、両親にせがんで希望の叶った同年十二月歌舞伎座夜の部「仮名手本忠臣蔵(五・六・七段目)」と「京鹿子娘道成寺」観劇が今日にまで及ぶ私と歌舞伎との結びつきを決定的なものとした。観劇当日、一階席上手寄りやや前方に着席し胸をときめさせて開幕を待つ間の興奮をよく覚えている。幕が上がると、切り株に腰を掛けた勘平が浄瑠璃の調べで笠を上げた瞬間のトロリとするような二枚目の風姿に心を奪われ、もうそれから先はすっかり舞台の虜となっていた。勘平と由良之助は翌年に十一代目團十郎を襲名する九代目市川海老蔵で、当時は芸も人気も充実期にあった。その他、お軽に中村歌右衛門、不破数右衛門と平右衛門に市村羽左衛門、千崎弥五郎に尾上九朗右衛門、定九郎に実川延二郎(三代目延若)、おかやに尾上多賀之丞、お才に沢村宗十郎(八代目)、源六に尾上鯉三郎、三人侍に先代片岡市蔵、片岡芦燕、中村藤太郎(現東蔵の兄)、力弥に市川新之助(十二代目團十郎)の顔揃えであった。そして、当時四十代の美しく充実した時期にあった歌右衛門の「京鹿子娘道成寺」が私の当夜の興奮を著しく高めたのは言うまでもない。今となつては五十二年も時代を遡る舞台ではあるが、両演目ともその記憶は未だ鮮明に残っている。

中学時代のその後は卒業月の昭和三十八年三月歌舞伎座「三代目實川延若襲名披露公演」昼の部観劇までの間、歌舞伎熱の覚めることはなくも、高校受験期間にあり劇場に足を運ぶ機会は無かった。

歌舞伎熱は慶應志木高校時代に更にエスカレートするも、運動部活動もあり歌舞伎座へは年に五、六回足を運ぶ程度であったと記憶している。高校時代の忘れられない思い出がある。それは地理の名物教師が一年の冬休みに宿題として課した自由テーマの研究で、自分なりの歌舞伎への考察を「現代歌舞伎診断」(わざわざ「伎」を「妓」としているところに当時の歌舞伎通気取りが透けて見て取れる)と題して提出したが、かの名物教師には「不

詳な分野なので、その評価は三田の大学の然るべき教授に託した」とのことで、その結果の評点はAであった。そう評価して戴いた「大学の然るべき教授」の確認を逃したことは残念だが、心中密かに当時の歌舞伎研究会会長でもあった文学部の池田弥三郎教授ではなかろうかと、未だ勝手に思い続けることで一人悦にいつている。

そんな中学・高校時代には二代目市川猿之助（初代猿翁）や八代目市川團蔵、脇役では六代目市川団之助等の舞台に接することが出来たことは今では貴重な財産となっている。

私の歌舞伎鑑賞が本格化したのは昭和四十一年の歌舞伎研究会入部後からで、大学時代四年間ではほぼ毎月の「総見」を通し、歌舞研仲間と共に三代目市川左團次、市川寿海等の晩年の舞台に接することが出来たことは貴重な思い出である。なかでも、昭和四十一年十一月の国立劇場開場初日の舞台を鑑賞出来たことは大学在学中の忘れられない記念すべき思い出として残っている。歌舞伎座、新橋演舞場と国立劇場以外では、渋谷東横ホールでの地下鉄銀座線往来の音を聞きながらの観劇が懐かしい。大学入学間もない六月、「すし屋」で延若演じるいがみの権太の鮓桶を脇に抱えた花道引つ込みに、勇気を振り絞り「河内屋！」と生まれて初めて掛け声を発したのがこの東横ホールであった。この時の舞台、弥助に中村扇雀（現坂田藤十郎）、お里に十三代目片岡我童、梶原に四代目尾上菊次郎、弥左衛門夫婦に二代目中村霞仙と五代目嵐璃珢の顔合せには、近年では到底味わうことの出来なくなった上方歌舞伎の匂いが充満していた。

大学在学中の貴重な体験に、歌舞伎研究会先輩より引き継いだ、塾員で劇評家の三宅三郎さん（「三宅先生」と呼んでいた）の観劇時のお世話がある。未だ車椅子が普及していなかった時代、足が不自由であった三宅さんを背負ってのご自宅と劇場を往復の間に拝聴した、その日鑑賞の歌舞伎、文楽、新派、邦楽等の感想・評価や、大正・昭和の名優の思い出話は、私の歌舞伎への興味と知識をいや増す大変貴重な機会となった。更に、しばしば「お社の日」観劇帰路の車に同乗の利倉幸一さん（当時「演劇界」編集長で劇評家）との車中会話の傍聴、土岐迪子さん（役者聞き書きの名手）、近藤端男さん（現共立女子大学教授）等の演劇研究、劇評関係者を交えての三宅さん主催談話会へのお世話と参加も、私にとっては忘れることの出来ない思い出である。

大学卒業以後、東京在住の限りにおいては都内での歌舞伎公演は現在に至るまでほぼ見続けることになる。但し昭和五十三年より平成五年までの間、三度に亘る合計約十年間に及ぶ海外駐在を経験し、当然だがその期間中の観劇機会は逃している。この間二度の日本への一時帰国期間においては、業務繁忙などにより腰を据えた芝居鑑賞が困難な時期となった。この駐在期間に四代目尾上菊次郎、松本白鸚、二代目中村鴈治郎、十七代目中村勘三郎、二代目尾上松緑、三代目延若等が他界した。更に最終海外駐在より帰国した平成五年秋以後の数年内には十三代目片岡仁左衛門、十三代目我童（十四代目仁左衛門を追贈）、八代目尾上梅幸などが次々に逝去した。約十五年に及ぶこの観劇空白期間は、昭和歌舞伎

を支えた中心役者の油が乗りきった、そして年功を積んだ芸の残光が輝く時期でもあった。それだけに「歌舞伎気違い（仲間内では“カブキチ”と略して呼んでいた）」を自認する私には、海外駐在により昭和の名人上手な役者の多くの舞台を見逃したことへの無念の思いは一入であった。

そうした経緯があり、最終海外駐在より帰国後の観劇にあたっては、日本不在期間に多くの舞台に接する機会を失した無念と寂寞の反動として、歌舞伎をより何倍にも面白く観る方法について真剣に考えるようになった。そしてその方法として辿り着いたのが自らの手で「劇評」を書くことであった。

爾来、平成八年の正月より現在に至るまで、「芝居観賞日記」と題した自作「劇評」を書き続けている。「歌舞伎」とせずに「芝居」としたのは文楽、他商業演劇も含めているからだが、実は歌舞伎以外の観劇はごく僅かである。

自作「劇評」はあくまでも自らのより面白い芝居観賞に資することを目的としている。そこで、その目的を達成する劇評を書くにあたり、いくつかのステップを自らに課している。

第一は、出来るだけ鑑賞する芝居についての知識を事前に吸収すること。書籍やテレビ放映の録画などより、先人の残した型・演出などを、更に「見取り狂言」であれば、作品全体の中での位置付け等を知ることに努める。見取り狂言場面の作品全体との整合を求めするには原作を読むことが最良だが、こればかりは手許資料に乏しい実情より実行は困難を極める。しかし案じることはない。劇評はあくまでも個人趣味のレベルであり、お芝居は予備知識がなくとも常に楽しく鑑賞出来るので、事前準備はその時々出来る範囲で充分である。たとえ予習時間がなくとも、劇場で幕の開く前に「筋書」にしっかりと目を通すだけでもよい。学究目的は一切無いので決して気負うことはない。

第二は、観劇ノートをとること。飽くまでもその基本は自分が舞台から素直に感じたままを書き留めることにある。事前に得た知識や過去に鑑賞した舞台の記憶や記録を通じ、鑑賞舞台での違いを発見すればそれも書き留めるようにしている。これによりその後においても、過去に鑑賞した舞台との違い、即ち脚本や役者の演じる仕種の違いなどを知ることが出来る。また、各場の上演時間を記録することで、同じ場面の再鑑賞時における舞台展開と上演時間との相関を知る楽しみもある。初見の芝居は見聞録として書き残すことで次の観賞への興味へ繋げることができる。

第三は自ら劇評を認めた芝居の再鑑賞にあたっては、必ず過去の自作劇評を読み直して臨むこと。自らが認めた劇評を読み返すことで記憶は驚くほど鮮やかに蘇るもので、必ずといってよいほど何がしかの発見がある。その発見を記録することが更に次の鑑賞への糧となる。

観劇にあたる参考資料としては長年に亘り収集した手元の蔵書、映像等を充てている。

「国立劇場上演資料集」(名優の芸談、演劇評論家の劇評、上演記録など、充実した諸資料が纏めて収載されており大変重宝している)、季刊雑誌「歌舞伎」、季刊誌「歌舞伎 研究と批評」、「歌舞伎 型の伝承」(志野葉太郎)、「名作歌舞伎の舞台鑑賞」(藤野義雄)、「舞踊手帳」(古井戸秀夫)、「魁玉夜話」(五代目歌右衛門)、「藝」(六代目菊五郎)、「女形の芸談・梅の下風」(六代目梅幸)、「舞台観察手引草」(杉賈阿弥)、その他、二代目松緑、十三代目仁左衛門、七世(当代)住大夫などの芸談、古今演劇評論家の劇評本等多々である。勿論「歌舞伎手帖」、「歌舞伎 型の魅力」の他、多数の渡辺保さんの著書が含まれていることは言うまでもない。自分でもちょっとマニアックかと思う書として、文庫本サイズの「色の名前で読み解く日本史」を観劇時の鞆の中に常備している。この本は役者の好みや時代とともに変わる衣装や道具の色の違いに気が付いた時の確認と記録に役立っている。

こうした資料を限られた時間内に適時効率よく利用できるよう常にデータ化しておくことが肝要である。作品名とその資料名を対比するリストを作成し、都度更新しておく。過去の歌舞伎上演録画ビデオ・CDも然りである。更に自作の劇評検索リストを作成し、作品別に観劇年月を記録しておけば観劇前に素早く過去の自作劇評に目を通すことが出来る。

自作劇評を認めるにあたりちょっとしたストレスもある。劇評は先ずは自分の目と耳で率直に感じたままを記すことの徹底をもって矜持としている。従い、観劇前の新聞劇評には目を通さない。渡辺保さんのウェブサイトにも毎月掲載される「歌舞伎劇評・今月の芝居」を開くのもジッと我慢する。これは、目の前の美味な料理のお預けを喰ったようで、思いのほか辛い。しかし、そんな辛さも新聞や雑誌「演劇界」紙上の諸劇評読後に、例え断片であろうとも演劇評論家諸氏と重なる自らの鑑賞眼が認められた時のちょっといい気分には代えられない。結局は自作劇評を書く前のストレスも後の楽しみとなる。そんな楽しみがある限り、私はこれからも芝居をより面白く観るために、自作劇評「芝居鑑賞日記」を書き続けるつもりでいる。

以上、自作劇評を認めることにより芝居鑑賞の楽しみは倍加されること請け合いを自負する、ある“カブキチ”の独り善がりな「劇評のすゝめ」である。

以 上